

視座の哲学としての梅園学

高橋正和

第一節 序

梅園の哲学が難解な理由の重要な一要素に、「視座」の哲学がある。「視座」とは、観察者である我々の観察の場所のことである。対象を観察する場合、通常、我々は特定の「視座」から観察する。この様な「視座」のことを「定点視座」と名付ければ、梅園が敢えて『玄語』の中で採用した「視座」は、究極的には「球体視座」とでも命名しなければならぬものであった。梅園の哲学の事を、私が敢えて「球体哲学」だとする理由はここにある。「視座」の哲学に梅園を覚醒せしめた、最初の衝撃的な事件は、「大地は丸い」と云う事実であった。読者は、梅園が二十八歳の春に試みた熊本の旅で写本した『天学大略名目抄』の次の様な内容を思い起して欲しい。

資料 1

天上ニハ昼夜アル事ナシ。天ハ常ニ昼ノミ也ト雖モ、日輪ハ常ニ地ノ渾体ノ半円ヲ照ス。故ニ、日、東ヨリ出テ西ニ入マデハ昼ニシテ、暮ニ西ニ入時ハ、日光、大地、蔭ニ成テ、地上、昧クナルヲ夜トス。此国ノ夜ハ、下ノ昼トシ、此国ノ昼ハ、下ノ国ノ夜也。此ノ如ク、大地、常ニ、半体ヲ昼ニシテ、半体ハ夜也。(50頁)

資料 2

東方、卯ノ時ナレバ、西方、酉ノ時也。西方、夜半ナレバ、東方、日中也。次ニ、昼夜長短ノ事、赤道暖帯ノ中度ノ国ハ、常ニ昼夜ノ長短アル事ナシ。一度、ウツル時ハ、其地則長短等シカラズ。此ヨリ段々南北ニ到テ、兩極ニ近キ国程、昼ト長短刻分、漸ク多少有テ、極下地ハ、昼夜、大ニ常ニ異ルニ至レリ。委クハ紙ニ記シ難シ。渾天儀ニヨツテ可詳之。(五一頁)

「資料1」の情報は、『玄語』の「地冊・没部」の中で、「条理」哲学の解説の為に、次の様に活用されている。地体ハ一ニシテ全ナリ。上下ト中外ト、伴ッテ能ク円ヲ為ス。……是コヲ以テ、一塊ノ大物、氣ノ資ル所、円ニ中外アリ。用ノ成ル所、直ハ面背ヲ分カツ。中外ハ定位ナリ。能ク其ノ処ヲ定ム。面背ハ変用ナリ。或ハ面シ、或ハ背ス。故ニ、其ノ緯ニ成ル者ハ、半面ハ冬ヲ為シ、半面ハ夏ヲ為ス。経ニ成ル者ハ半面ハ昼ヲ為シ、半面ハ夜ヲ為ス。（『梅園全集』一三二頁上）

「地体」とは「地球一体」の略で、一個の地球のことである。ここでは「地体」が当面の「境域」とであると特定しているのである。そこで、「一個の地球」を当面の「条理」を考える場合の「境域」と特定すれば、そこには、「一即一」的な「中外」論と「一即一」的な「面背」論が「条理」的に成立する。「面」とは、例えば「一個の地球」上の東半球に生活している日本人にとっては、東半球が「面している半面」と言うことになる。逆に、「背」とは、西半球が「背している半面」と言うことになる。「或ハ面シ、或ハ背ス」とは、此の状況を述べたものである。「経ニ成ル者」と「緯ニ成ル者」も「条理」的「一即一」である。「経緯」論で捉えたものである。太陽は経線上を東から西へと巡り行く。地球上の「昼」と「夜」の現象は、此の様な太陽の運動に依って発生する。「一個の地球」には、今一つの「視座」がある。南半球と北半球がそれである。「一個の地球」上の北半球に生活している日本人にとっては、北半球が「面している半面」と言うことになる。逆に、「背」とは、南半球が「背している半面」と言うことになる。「或ハ面シ、或ハ背ス」とは、此の状況を述べた者でもある。太陽は緯線上を黄軸が、南緯二十三度から北緯二十三度へ、北緯二十三度から南緯二十三度へと移行していく。地球上の「冬」と「夏」の現象は、此の様な太陽の

運動に依って發生する。

「一個の地球」上に發生する昼夜現象の中でも、「視座」の哲学にとって、格好の現象があった。其れは南極点と北極点及び其の周辺地域に現象する者であつた。『玄語手ひき艸』の中でさへ、わざわざ次の様に述べている。

南北極の真下の国は、日月、よこまはりにまはりて、一年、一昼夜となる。

『天学大略名目抄』には何故か記されていないが、此の地球上に於ける特殊な現象も、『天学大略名目抄』の情報源である『天経或問』には、次の様に明記されている。

掲子ノ曰ク、兩極ノ下ハ、天輪、横ザマニ繞リテ、半年ヲバ昼トナシ、半年ヲバ夜トナス。（西川本・五丁表）

『玄語』哲学への案内書として、梅園が自ら物した小冊子『玄語手ひき艸』の中に、わざわざ記されていることに、読者は特に留意していただきたい。

「資料二」の情報源は、「昼夜」カテゴリーを「卯酉」カテゴリーで捉えて見せたものである。「卯」とは今の午前六時、「酉」とは今の午後六時の事である。「視座」の哲学を理解する場合に「資料二」で最も注目すべき情報は、「極地下ハ、昼夜、大ニ常ニ異ル」と言う日本の様な中緯度・温帯地方では経験できない特殊な現象である。梅園が構想した「条理」の普遍的な妥当性は、このような特殊な現象にも適合する事によって、其の強度を増すものである。梅園が此の特殊現象に、殊の外に執着している理由はここにある。

「資料二」の後半に展開された特殊現象について、梅園は『贅語』の中で、次の様に解説している。

極北ノ地ハ、我ガ春分ニシテ日ヲ地上ニ見ル。横回シテ暮レザルコト、一百八十余周ナリ。我ガ秋分ヲ過ギルヤ、全ク日ヲ地上ニ見ズ。冥朦トシテ曙ケザルコト、一百八十余周ヲ度カル。是コニ於イテ、南極ノ地ハ、方メ

テ日ヲ地上ニ見ル。横回シテ暮レザルコト、一百八十余周ナリ。又、全ク日ヲ極南ノ地ニ見ズ。故ニ、二極ノ地ニ当タル者ハ、一歳ニ代ワルガワル一昼夜ヲ為ス。(『梅園全集』二八八頁)

「極北ノ地」とは北極点及び其の周辺地のこと、「極南ノ地」とは南極点及び其の周辺地のことである。地軸を「一即一一」の「一」とすれば、南極点と北極点は紛れもなく「一一」である。「横回シテ暮レザル」現象は、あの白夜現象のことである。此の文面上には、慥かに南極点と北極点の白夜現象を交互に述べている。しかし、其れは「視座」を百八十余度転換した為であつて、「一即一一」的に南北の両「視座」から全面的に觀察すれば、南極点が白夜の時には、即時的に北極点は「暗い昼」になる。「暗い昼」を表現する概念は無いので、ここでは敢えて「白夜」の敵對概念として「黒昼」と表現することにする。「一歳ニ代ワルガワル一昼夜ヲ為ス」と言う兩極地帯に展開される「昼夜」の特殊現象は、これを全面的に觀察すれば、兩極地帯では、「白夜」と「黒昼」が「一即一一」的に展開されると言うことになる。『贅語』の此の資料の直ぐ先に、

我ト一百八十余度ヲ距ツルノ地ハ、我ト昼夜ヲ反ス。

と述べて、認識論の「反觀」の成立する自然學的基础を、梅園はそこに確認している。同様のことは、太陽が南緯二十三度半と北緯二十三度半の間を交互することに依つて生ずる春夏秋冬の四季の現象に依つても、次の様に確認されている。

中線以北ハ則チ、斜メニ南至ノ日ヲ望ミテ、以テ冬ト為シ、仰ギテ北至ノ日ヲ瞻テ、以テ夏ト為ス。中線以南ハ則チ、斜メニ北至ノ日ヲ望ミテ、以テ冬ト為シ、仰ギテ南至ノ日ヲ瞻テ、以テ夏ト為ス。故ニ、南地ガ冬ナレバ則チ北地ハ秋ナリ。南人ガ葛スレバ則チ北人ハ裘ス。中線ヨリシテ南北スレバ、氣候ハ同ジクシテ、而シテ其ノ

「中線」とは今日でいうところの赤道の別称である。一個の地球を、赤道を境に「一即一」的に分割すると、南半球と北半球が「一一」的に顕現してくる。そこで、中線以北即ち北半球の住人は、「南至ノ日」即ち南緯二十三度半のいわゆる南回歸線上に有る太陽を斜めに望見して、其の季節を「冬」だと決め、「北至ノ日」即ち北緯二十三度半のいわゆる北回歸線上に有る太陽を斜めに仰ぎ見て、其の季節を「夏」だと決める。故に、「一即一」的に南半球と北半球の両「視座」から全面觀的に觀察すれば、南半球が「冬」の季節には、即時的に北半球は「夏」である。逆に、南半球の住人が「葛」という名の夏服を着ている季節には、北半球の住人は「裘」という名の冬服を着ている季節に、即時的になっている。「中線ヨリシテ南北スレバ、氣候ハ同ジクシテ、而シテ其ノ時ヲ反ス」とは、故に、赤道を境にして兩分される、一個の地球の南半球と北半球の氣候が、「夏」と「冬」が、「一一」的に現象すると言う「同一性」を保有しながら、即時的に其の到来の時期を相い反しているのだと結論するのである。ここでは、「夏」と「冬」のみが話題に上っているが、「春」と「秋」に關しても同様の事が成立するのは云うまでもない。

此のテーマを終わるに際して、私は読者に、驚嘆すべき真理が改めて明らかになった事実をここに紹介しておく。其れは、梅園は熊本で『天学大略名目抄』の写本を作成した二十八歳の時点で、前に紹介した様な自然科学的事実其れ自体の記録に留まること無く、既に十分に「一即一」的存在論と「反觀合一」と云う四字熟語で表徴される認識論の構想にまで辿り着いていたと云う事実である。『天学大略名目抄』と合冊されている『天地之口伝決』に収載されている次の様な一節が其れである。

周髀算經ニ曰ク、北辰ノ下、六月ハ日ヲ見、六月ハ日ヲ見ズ。春分ヨリ秋分ニ至ルマデノ六月ハ常ニ日ヲ見、秋

分ヨリ春分ニ至ル六月八日ヲ見ズ。昼ト為ルモ日ヲ見ズシテ夜ト為ル。イハユル一歳ハ、即チ北辰ノ下ノ一昼夜ナリ。（六十八頁）

愚、按ズルニ、此レハ北方ヲ論ズルモ、未ダ南方ヲ論ゼザル者ナリ。南方モ北方ニ準ゼヨ。

『周髀算經』とは漢代の数学の書物で、梅園は『贅語』の中にしばしば引用している。「北辰」とは北極星のことであるから、「北辰ノ下」とは北極地方と言うことになる。「昼ト為ルモ日ヲ見ズシテ夜ト為ル」とは「白夜」の反対概念の「黒昼」のこと。「イハユル一歳ハ、即チ北辰ノ下ノ一昼夜ナリ」とは、温帯中緯度地帯の日本人が「一歳」即ち一年と云う期間は、北極地方では「一昼夜」という形式で表現されると云うのである。「白夜」の六ヶ月を夜、「黒昼」の六ヶ月を昼と考えるからである。

「愚」とは梅園の自称である。「一即一一」の「条理」に従って考える限り、「一一」内の「一」しか扱っていないことになる。「偏全」カテゴリーで示せば、「全」面観ではなくして「偏」面観にしか過ぎないことになる。「北方ヲ論ズルモ、未ダ南方ヲ論ゼザル者ナリ」とは、此の偏面観に対して、「条理」的立場から此判を加えたものである。此の梅園の此判的見解の中で、最も秀逸なのは、最後の「南方モ北方ニ準ゼヨ」と言う命令的提言である。此の思考法こそが、実は「反観」の思考法であるからである。

一個の地球を「一即一一」の「一」とした時に、南半球と北半球が「一一」的關係になることは、以上の考察の結果、充分に明らかになったと思う。少なくとも、自然哲学の側面から評価する限り、画期的な業績であった。しかし、梅園は、決して哲学の為の哲学に留まるところで満足してはいない。彼は、人類が人類史の中で繰り返してきつてきたところの、自己中心的な、それ故に、偏見に充ち満ちた民族の見解を否定する為にも、此の哲学を活用

している。其の個別的な具体例は、何れ稿を改めて挙示するとして、ここでは、今日の世界史の只中でさえ、問題を引きずっている南半球の発展途上諸国に対する北半球の先進諸国の国民の、言われ亡き優越意識を深刻に反省せしめる契機と成り得る一節を紹介しておこう。

北人ハ身ヲ西線（赤道）ノ北ニ偏シテ、北ヲバ其ノ正地ト為シ、南人ハ身ヲ西線ノ南ニ偏シテ、南ヲ其ノ正地ト為ス。（『梅園全集』一一九頁）

第二節 上下視座

梅園に衝撃を与えた「大地は丸い」という事実が産みだした新しい哲学に「上下」論がある。『天学大略名目抄』と同時に写本した『天地之口伝決』の次の様な内容を想い起こして頂きたい。

資料3

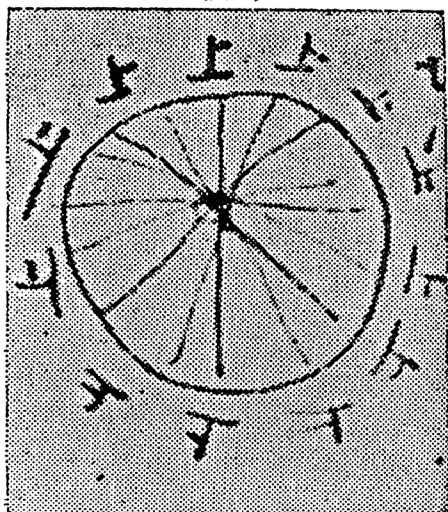
地ハ土石ヲ体トシテ其形、渾円也。元、天ト相聯属シテ、天ノ正中ニ在テ、万国周附シ、四面ニ、人、居ス。六十四頁）

資料4

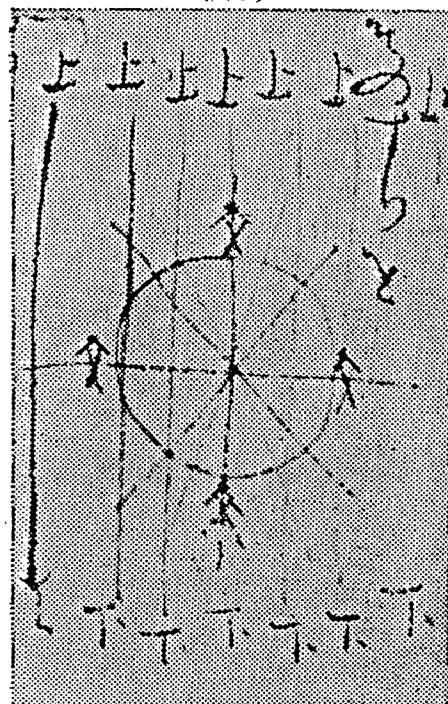
人ノ居立スル処、皆、円体ニヨレリ。総テ方偶ナク、四面、都テ皆上也。可墜処ナク、天ノ正中ニ適在シテ、可倚処ナシ。（六十四頁）

「資料3」と「資料4」の情報は、『玄語手ひき艸』の中に、「図一」の様に地球を取り回して人間が立っている図が有り、其の図説として次の様に活用されている。

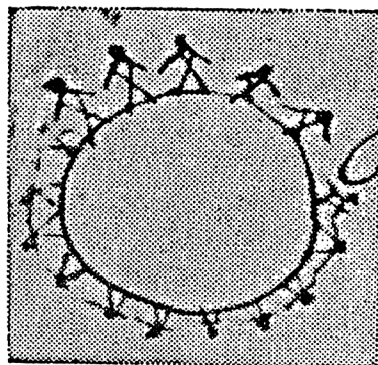
(图 2)



(图 3)



(图 1)



ケ様にまろきものゆへに、人は是をとりまはしてたり。ケ様なものなりと人にとけども、下なる人はさかさまに天にむけておち、上なる水は側にむけて流れんとおもへり。是、天地を知らずして、上下の位にまどへるなり。地はまどかにして、天の正中にあり。外を天かこみてめぐれば、下といふのは地中也。

また、「図二」と「図三」を示して、次の様な図説として活用している。

上下の条、ケ様なり。そのすぢをケ様にみる程に、地の円なることをいつ迄も合点せぬ也。むかしの人もこの病ありし故、仏家には頂弥、儒者は四遊・周髀などいふ説など様々にあり。其うち差別はあれども、先、下といふは地球のまん中にして、外は上なりと心得れば、一通きこえ侍るなり。

此の二つの資料は、梅園が大きく依存している『天経或問』の次のような一節が、其の資料源である。

☆ 『天文略』ニ曰ク、地ハ円体ヲ為シ、空際ニ聯ル。上下四旁ニ、皆、人ノ居ル有リ。(図冊・十二丁表)

☆ 四面ハ都ベテ是レ上ニシテ、墜ツ可キ処ナシ。天ノ至中ニ適シテ(主人公となつて)亦タ倚ル可キ処ナシ。

(天冊四丁表)

「資料3」の情報は、『玄語』の「地冊没部」の中で、「条理」哲学の解説の為に次の様に活用されている。

地ハ一円塊ニシテ万物ハ環リテ之レニ居ル。氣ヲバ上ト為シ、質ヲバ下ト為シ、転ヲバ外ト為シ、持ヲバ内ト為ス。昇ル者ハ天ニ之キ、降ダル者ハ地ニ着ク。方ハ東西ヲ以テ定マリ、位ハ上下ヲ以テ立ツ。

(『梅園全集』一三二頁下)

「資料3」の「渾円」とは「丸い」こと、故に、「地ハ……渾円也」とは、大地は球体状であると言う意味である。

『玄語』では是れを受けて、「地ハ一円塊ニシテ」と述べている。「四面ニ、人、居ス」とは「地球の周囲にグルリ

と人間が居住している」ことである。『玄語手ひき艸』では是れを受けて、「ケ様にまろきものゆへに、人は是れをとりまはしてたてり」と述べ、『玄語』では是れを受けて、「万物ハ環リテ之レニ居ル」と述べている。『玄語』には「人ノ身ハ万物中ノ一物」（『梅園全集』二一九頁上）とも有るので、「万物ハ環リテ之レニ居ル」とは「人間をも含む万物は、環状に地球を囲んで居住している」ことである。

「資料4」の情報は、『玄語手ひき艸』では是れを受けて、「ケ様なものなりと人にとけども、下なる人はさかさまに天にむけておち、上なる水は側にむけて流れんとおもへり。是天地をしらずして上下の位にまどへるなり」と述べ、『玄語』では是れを受けて、次の様な「条理」哲学を構想している。

イ 地ハ塊焉タル一円物ニシテ、下ハ能ク上ヲ為シ、西ハ能ク東ヲ為ス。（大地は塊状の一個の球体状の物であつて、下の方向は即座に上の方向と成り得、西の方向は即座に東の方向と成り得る。）（『梅園全集』一一〇頁上）

ロ 水燥ハ、上下中ニ在リテ上下ス。（「水燥」は「上下」と云う界域に於いて、「水」は下降し、「燥」は上昇する。）（『梅園全集』一二三頁下）

ハ 天地ヲ以テ之ヲ觀レバ、氣ハ上リ、質ハ下ル。己ヲ以テ之ヲ觀レバ、頭ハ上ニ、足ハ下ナリ。（「天地」と云う「天人論」にいわたる「天」的観点から「直円」論にいわたる「直」の界域を観察すると、「氣」は上昇し、「質」は下降する。「人」的観点から其れを観察すると、其れは偏面観なるが故に、人間の頭の方向が「上」で、足の方向が「下」である。）（『梅園全集』一二三頁下）

「資料4」の「人ノ居立スル処」とは、「人間が居住したり、立ったりしている場所としての大地、即ち地球」のことである。「皆、円体ニヨレリ」とは、「人間や万物は悉く此の地球に依存して生活している」ことである。「総

テ方偶ナク」とは、支那哲学を支えた自然観としての「地方体説」を否定したもので、いわゆる「東南西北」の「四方偶」が無いというのである。「可墜処ナク」とは、「墜ツ可キ処ナク」と訓み、地球上の万物は、地球上から地球外へと墜落していく場所が無いと云うのである。

(イ)の「下は能く上を為し」と言う「上下」論は梅園哲学の白眉である。此の「上下」論を理解する為には、『玄語手ひき艸』に掲載されている「図2」が至便である。地球の周辺部が上で、中心部が下であるとしているからだ。故に、例えば北極点に立っている人から観れば、其の人の足下の延長線上に地球の中心点があり、そこが最下部であるから、足下の延長線は、地球の中心点を通過すると、其の時点から上へ上へと昇っていくことになる。そして、南極点に立っている人の足下から頭上へと伸びていく。梅園の「上下」論、即ち「上即下の哲学」はこのような構造を持っている。(ハ)の「已ヲ以テ之ヲ觀レバ、頭ハ上ニ、足ハ下ナリ」は、故に梅園が否定する「上下」論である。

以上の様な「上下」論を、時空論の中で一括して展開しているのが、『玄語』の次の様な一節である。

時ナル者ハ、彼此、相ヒ向カフ。彼ノ前トスル所ハ我ノ後ロトスル所ニシテ、我ノ前トスル所ハ彼ノ後ロトスル所ナリ。是ノ故ニ往ク者ハ将ニセントスルニ向カヒ、既ニスル所ニ背キ、来タル者ハ将ニセントスルヲ離レテ既ニ就ク。地ナル者ハ彼此ガ相ヒ背キ午(南)ノ上トスル所ハ子(北)ノ下トスル所ニシテ、子ノ上トスル所ハ午ノ上トスル所ハ子(北)ノ下トスル所ニシテ、子ノ上トスル所ハ午ノ下トスル所ニシテ、子ノ上トスル所ハ午ノ下トスル所ナリ。是ノ故ニ、午ナル者ハ午ヲ上ニシテ子ヲ下ニシ、子ナル者ハ子ヲ上ニシテ午ヲ下ニス。其ノ事ハ則チ反ス。其ノ理ハ則チ同ジ。

〔梅園全集〕一〇八頁上

京都大学文学研究所の島田虔次教授は、「思想大系本」の『三浦梅園』（岩波書店刊）の中で此の一節に対し

て、次の様な誤訳と意味不明の訳を下している。

時なるものは、彼此あい向かい、彼の前とするところは（たとえば彼では冬はもう終わったのに）我の後とするところである。それゆえ、往くものは、將に向かつて既に背き、来るものは將を離れて既に就く。地（地球）なるものは、彼此あい背き、午（南）で上とするところは子（北）で下とするところ、子で上とするところは午で下とするところである。それゆえ、午なるものは午を上にして子を下とし、子なるものは子を上にして午を下とする。事は反するが、理は同じである。（一四四頁）

明らかなる誤訳は「たとえば彼では冬はもう終わったのに」と云う補注に認められる。此の部分は、梅園の「時空」論の内の時間論に関するもので、其れも春夏秋冬という四季境域での話ではなく、「今中」論の内の「今」論の境域での話であるからである。なんとすれば、此の一節は、其のすぐ前に展開されている、次の様な本文の注釈文でもあるからである。

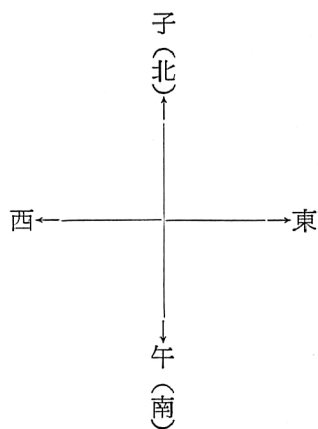
・中ハ乗載ノ地ト為リ、今ナル者ハ往ヲ送り来ヲ迎へ、將ニセントスル者ヲ前ニシ、既ニスル者ヲ後ニス。

此の本文を素直に読解すれば明らかな様に、「彼」とは「將にセントスル者」即ち「未来」のことであり、「此」とは既ニスル者」即ち「過去」のことである。故に、「彼」と「此」は「今」という瞬間を中に挟んで、「図1」のように向かい合っていると考えれば良い。

(図1) 我的前・彼の後ろ・彼……………今 ↑……………我……………彼の前・我的後ろ
 未来 過去

来・向 ↑……………往・背
 将……………来 ↓……………今 ↑……………往……………既
 来……………↓

以上が、「今」「彼我」「前後」「往来」「将既」による時間論である。「午の上とする所……」以降は、次の様な図を参照すれば明らかになる空間論である。



「午の上とする所」とは「北」の方向であり、「子の下とする所」とは「南」の方向である。「子の上とする所」と「午の下とする所」は共に「北」の方向である。「上とする所」「下とする所」の主語は「午」や「子」に立っている人を想定すれば良い。そして、「上下」は「頭上足下」の「上下」を想定すれば良い。

「是ノ故ニ」以下は、次の様に訳せば、梅園独特の「条理」的な「視座の哲学」の構造が鮮明に浮かび上がってくる。此の様な訳で、「午」の地点、例えば南極点に立っている人は、「午」の方向を「上」の方向とし、「子」の方向を「下」の方向とする。逆に、「子」の地点、例えば北極点に立っている人は、「子」の方向を「上」の方向とし、「午」の方向を「下」の方向とする。

此の資料で、最も難解な部分は、「其の事ハ……」以下の一節である。「其ノ事ハ反スル」を、島田の様に「事は反する。」と書き換えても、常識的には是れを翻訳とは云わない。「其ノ事」とは、例えば南極点に立っている人が「上」とする方向は、北極点に立っている人が「上」とする方向と互いに逆方向になっているが、それぞれの人が「上だと判断する事」、此の「事象」のことを梅園は「事」と表現する。そして、「互いに逆方向になっていること」、此の状態を「反ス」と表現する。「理ハ則チ同シ」とは南北の両極点を貫く一本の直線は、同一の一本の直線であると云うのである。

此の最後の資料が重要な理由は、「上下の事」と「理」が「一一即一」の「条理」を構成しているからである。

第三節 面背視座

春夏秋冬と昼夜の現象は、条理哲学の正当性を証明する為の格好の自然現象であった。梅園が『玄語』の中で、此の両現象を頻用する理由はこゝにある。こゝでは「面背」というカテゴリーで「一一即一」「一即一一」の「条理」の実態を解明してみよう。此の「面背」カテゴリーのヒントも、実は梅園二十八の熊本の旅で写本した『天学大略名目抄』の中の、次の様な資料にあった。

資料一

日輪ハ常ニ地ノ渾体ノ半円ヲ照ス。故ニ、日、東ヨリ出テ西ニ入ルマデハ昼ニシテ、暮ニ西ニ入ル時ハ、日光、大地ノ蔭ニ成テ、地上、昧クナルヲ夜トス。此国ノ夜ハ、下ノ国ノ昼トシ、此国ノ昼ハ、下ノ国ノ夜也。此ノ如ク、大地、常ニ半体ヲ昼ニシテ、半体ハ夜也。(五一頁)

資料2

東方、卯ノ時ナレバ、西方、酉ノ時也。西方、夜半ナレバ、東方ハ常ニ日中也。(五一頁)

「資料1」の「日輪ハ常ニ地ノ渾体ノ半円ヲ照ス。故ニ、日、東ヨリ出テ西ニ入ルマデハ昼ニシテ、暮ニ西ニ入ル時ハ、日光、大地、蔭ニ成テ、地上、昧クナルヲ夜トシ」は『玄語』の「地冊露部・一七八頁」に、「条理」的に次の様に活用されている。

資料3

地ハ自ら照ラスコト能ハズ。一半ノ光ヲ日ニ受ケテ昼ト為ス。月モ亦タ自ら照ラスコト能ハズ。一半ノ光ヲ日ニ受ケテ明ト為ス。其ノ光ヲ受ケザル処ハ、地ニ於ヒテハ夜ト謂ヒ、月ニ於ヒテハ魄ト謂フ。

梅園は『玄語』の中で、「面背」を次の様に概念定義している。

資料4

混地ノ二用ハ、一面一背ナリ。我ノ居ル所ヲバ面ト為シ、居ラザル所ヲバ背ト為ス。(『梅園全集』一二五頁上)
 「混地」とは「渾地」のこと。梅園が敢えて「混地」と云う概念を用いるのは、実は条理哲学に於いて最も重要な「混糲」カテゴリーで捉え直したからである。「混」的視座と「糲」的視座と云えば分かり易いであろう。「混地ノ二用」とは「体用」論視座から捉え直したものである。其れは「条理」的に捉えれば、明らかに「一即一」的である。「一面一背」とは「一一」的に捉えたものである。「我ノ居ル所ヲバ面ト為シ、居ラザル所ヲバ背ト為ス」とは、例えば、日本人は北半球と東半球を「面」、南半球と西半球を「背」と考えるのだ。梅園は、更に次の様に続ける。

資料5

ここでは、「面背」カテゴリーに依存して、「反観」的認識論を展開している。「観ル」とは直接的に観察すること、「察ス」とは間接的に推察することである。

梅園は、更に次の様に続ける。

資料6

故ニ、面北ノ地ナル者ハ南ヲ背ニス。故ニ、日、北スレバ則チ夏、南スレバ則チ冬ナリ。北向ノ衢ニ当タレバ則チ春、南向ノ衢ニ当タレバ則チ秋ナリ。

「面北ノ地」とは北半球のこと。「人ハ南ヲ背ニス」とは、北半球に住んでいる人から観れば、南半球は「背」的であると云うのだ。「日、北スレバ則チ夏、南スレバ則チ冬ナリ」とは、太陽が赤道上から北緯二十三度半の北回帰線に移動すれば夏の季節が訪れ、南緯二十三度半の南回帰線に移動すれば冬の季節が訪れると云うのである。「北向ノ衢」とは太陽が南回帰線から北回帰線へ「北ニ向カッテ移動スル際ノ衢道」即ち赤道のことである。此の時の季節は当然、春である。「南向の衢」とは太陽が北回帰線から南回帰線へ「南ニ向カッテ移動スル際ノ衢道」即ち赤道のことである。此の時の季節は当然、秋である。

梅園は、更に次の様に続ける。

資料7

面南ノ地ナル者ハ北ヲ背ニス。故ニ、日、北スレバ則チ冬、南スレバ則チ夏ナリ。北向ノ衢ニ当レバ則チ秋、南向ノ衢ニ当レバ則チ春ナリ。

「面南ノ地」とは南半球のこと。其の他は、全て「資料6」の逆である。

面スル所ハ觀ル可シ、背スル所ハ察ス可シ。

梅園は、更に次の様に続ける。

資料 8

故ニ、混地ノ経用ハ、一邊ハ雪ヲ降ラセ、一邊ハ雷ヲ発ス。

「混地ノ経用」とは、梅園の時間論を十分に自得しなければ、理解困難な思想である。現に、島田教授も「ゆえに地ぜんたいの経用(?)」という様に「?」マークを付して、解釈を放棄しているからである。「混地」とは「混祭」カテゴリーの「混」的視座から展望したものである。問題の「経用」は「経緯」カテゴリーの「経の作用」のこと、即ち、「時間」の側面から展望した「混地の現象」のことである。具体的には「雪を降らす」と「雷を発する」とこの両現象である。南半球と北半球に「同時視座」を立てれば、太陽が北緯二十三度半に位置している時には、南半球は冬の季節であるから、南半球の一邊には雪が降り、北半球は夏の季節であるから、北半球の一邊には雷が発生する訳である。

* 「経用」の参考資料

・ 天ハ緯具ヲ設ケ、諸ヲ中央ニ塞サギ、以テ、夫ノ経具ノ、諸ヲ袞袞ニ通ズル者ニ合ツス。(「梅園全集」六一頁上)

・ 経通ニ相ヒ繼ギ、緯塞ニ相ヒ並ブ。(「梅園全集」八七頁上)

・ 一経一緯、神ハ其ノ緯ニ居ス。(「梅園全集」九〇頁上)

資料 9

是コヲ以テ、一面背ヲ分カタバ則チ昼夜冬夏アリ。混地ヲ以テスレバ則チ夏即冬、夜即昼ナリ。

「資料9」は以上の「資料4」から「資料8」迄の結論である。「面背ヲ分カテバ」とは「祭」的視座から展望すれば、と云うことである。「混地ヲ以テスレバ」とは「混」的視座から展望すれば、と云うことである。しかも、此の両視座からして既に「一一」的である。「昼夜冬夏アリ」とは、混然たる一個の地球を東半球と西半球に「一一」的に分割して展望すれば、両半球は「昼」と「夜」を交互に現象し、其れを南半球と北半球に「一一」的に分割して展望すれば、両半球は「冬」と「夏」を交互に現象すると云うのである。「夏即冬、夜即昼」とは混然たる一個の地球を混然たるままに展望すれば、そこには「春夏秋冬」の四季も「昼夜朝夕」の変化も「即時現象」と化すると云うのである。是れこそ、梅園が「一一即一」の「条理」に従って「一」的世界に迫り着いた時の哲学的風景であつた。そして、此の風景が最も展望できる「視座」、其れは、私が此の論文で初めて学界に公表する「球体視座」以外の何者でもなかつた。「一即一」「一一即一」の「条理」は、斯くして、此の自然現象からも見事に帰納できる訳である。

「面背」を「視座」と云う「境域」に限定して思想すれば、梅園が構想した哲学は以上の如きものである。しかし、「一即一」「一一即一」の「条理」は、時間的「境域」としての「今端」と空間的「境域」としての「中外」、換言すれば、梅園のいわゆる「宇宙」に貫通充満している。

* 参考資料

・ 理ハ、其ノ一ヲ一一ニシテ、剖析スルコト窮マリ無シ。(「全集」四七頁上)

第四節 全偏視座

「面背」視座と密接に係わりながら、其の「境域」を異にする視座に、「全偏」視座がある。「贅語」の中の、次の

様な「資料」が其れである。

資料 1

蓋シ、我ハ、半天地ヲモツテ全天地トナス。又、中線ヲ分カチテ、各々両辺ニ居ス。故ニ、北人ハ身ヲ赤道ノ北ニ偏ニシテ、偏北ヲ以テ其ノ正中ト為ス。南人ハ身ヲ赤道ノ南ニ偏ニシテ、偏南ヲ以テ其ノ正中トナス。

〔梅園全集〕四三七頁上〕

「半天地」とは、南半球と北半球、及び、東半球と西半球とそれぞれの半球の上に無限に広がる大空のことである。故に、「全天地」とは、云うまでも無く、球体状の「地球」と其の周囲に無限に広がる大空のことである。ここでは、話題の都合上、南半球と北半球のみが其の「境域」である。「中線」とは赤道のこと、故に、「各々、両辺ニ居ス」とは、人類は南半球と北半球の両半球に居住していること、「北人ハ身ヲ赤道ノ北ニ偏ニシテ、偏北ヲ以テ其ノ正中ト為ス」とは、北半球に居住する日本人や支那人が、自己中心的な思想や価値観を保有している事実を批判したものである。「南人ハ身ヲ赤道ノ南ニ偏ニシテ、偏南ヲ以テ其ノ正中ト為ス」とは其の逆である。梅園が否定する此の様な「一面観」の事を、私は、「偏面観」と命名しておく。

資料 2

・全方ナル者ハ動静ノ規矩ニ成ル。天ナリ。偏方ナル者ハ十字ノ衡従ニナル。人ナリ。〔梅園全集〕二一七頁上〕
此の「資料」は、「方位」境域の「方」に付いてのみ述べたものである。常識的な東西南北は、半天地的平面的なもので、「偏方」とはこれである。梅園は此れを評価しない。北極点と南極点を貫通する地軸は直線状であるから、南北の方向は「直」的であるが、東西の方向は「円」的である。梅園は、此の資料の直ぐ前で、「東西ナル者ハ、各

々輪旋スレバ、則チ、東西ハ指点ノ地ナシ」と主張している様に「円」的で、東回りか西回りかと云う回転方向を意味する。「全方」とは、此の立体的な方位である。「十字ノ衡従」とは、地図等に描かれている十字型の方位記号を想定すれば良い。「衡」とは「左右」、「従」とは「前後」の方向のことである。梅園が構想した方位論は、「全」的方位論としての「球体方位論」であった。しかし、「偏」的方位論をも「一即一」的に重視するところに、梅園の「条理」哲学の懐の深さが有ることを忘れてはならない。「偏」と「全」も無限に「分合」を繰り返すからである。次の「資料」は其の点で重要である。

資料3

・人ハ地ノ半ニ倚リテ、以テ輿地（地球）ヲ平望ス。日ノ出入ニ従ツテ、而シテ、東西ノ成リ、極ノ隠見ニ依リテ、而シテ、南北ノ分カル。繩ハ上下ヲ生ジ、身ハ中辺ヲ定ム。規矩ヲ衡従シテ、東西南北ヲ定ム。是レ、人ガ地面ノ条理ニ従ツテ、而シテ方位ヲ定ムル者ナリ。（『梅園全集』一一八頁上）

「人ハ、地ノ半ニ倚リテ」とは、通常の人間のとる「偏面」視座から展望した場合にはと云う意味である。具体的には、南半球や北半球や東半球や西半球の内の何れかの内の一半球のみに、観察者としての我が身を倚りかけて、と云う意味である。「以テ輿地（地球）ヲ平望ス」とは、「偏面」視座から「輿地」即ち丸い地球を、球体としてではなく、平面として展望する、と云う意味である。そうすると、太陽が昇ってくる方向が「東」で、太陽が沈んでいく方向が「西」である。（仮に北半球に視座を設定した場合、）天の南極が隠れている方向を「南」とし、天の北極が見える方向を「北」とする。繩を吊るすと「上下」が生じ、人が立つと「中外」即ち中心と周辺が定まる。「規矩ヲ衡従シテ、東西南北ヲ定ム」とは、「規」即ちコンパスを回転させて「東西」の回転方向を定め、「矩」即ち定規を立て

て「南北」の延長方向を定める、と云う意味である。「是レ、人ガ地面ノ条理ニ従ッテ、而シテ、方位ヲ定ムル者ナリ」とは、以上、地上に立っている、と或る人間を中心にして成立する「東西」「南北」「上下」「中遍」の各方位は、実は「天」的な「条理」に従って定めた者ではなく、「人」的な「条理」に従って定めたものである、と云う意味である。

此の「資料3」がいかに難解なものであるかは、島田教授の次の様なチンプンカンプンな迷訳を参照すれば明らかになるであろう。

人は地の半に倚って興地（ちきゅう）を平望する。日の出入によって東西が成り、極の隠見によって南北が分れる。（吊された）縄は上下を生じ、身体は中と辺を決定する。規矩を縦衡（たてよこ）にして（矩を縦、規を衡にして）東西南北を定める。これは人が、地面（地と面、かお？）の条理にしたがって方位を定めるのである。

（岩波・「三浦梅園」一五八頁上）

梅園は本質的には「十字の衡従」を是認しない。例えば、『贅語』の開巻劈頭に次の様な資料がある。

資料4

・今人（古人の対）ハ生死ヲ以テ、己ノ天地ヲ闔闢シ、十字東西ノ上ニ座シテ、以テ、天ヲ碧琉璃ノ中ニ望ム。而シテ、天下ノ人ハ、皆、眼ヲ斯ニ開クモ、晋ハ此レヲ以テ一大疑団ト為ス。（二八四頁下）

「生死」を梅園は「生化」とする。「己ノ天地ヲ闔闢シ」とは、天地的に把握された自己一身の生命を開始したり終了したりすること。「十字東西」とは十字型をした「東西南北」のこと。梅園は、「東西」だけで、「東西南北」を表現する様な表現形式を頻用するからである。要するに、梅園は「生死」カテゴリーに依る時間論と「東西南北・

十字方位」に依る空間論を「一大疑團」とするところに自己の哲学の基礎を据えたのである。

それでは、梅園が究極的に構想した、十分に是認できる「東西南北」の方位とはどの様なものと云えば、それは、徹底的に「全」的視座から展望した次の様な天文学的風景である。

資料5

・数万年ノ後ニ、黄赤ハ同ジク其ノ輪ヲ合ッシ、同ジク其ノ軸ヲ合ッス。此ノ時、日ハ恒ニ赤道ヲ行キ、昼夜ハ長短アルコト無シ。二極ハ恒ニ半輪ノ日ヲ見、冬夏ノアルコト無シ。漸ヤクニシテ黄ト赤ト輪ヲ分カツ。数十萬年ヲ歴テ、黄輪ハ赤輪ニ当タリ、赤輪ハ黄輪ニ当タル。是コニ於イテ、北ハ東ト為ル。赤道ノ南北ノ暮レザル者ハ、各々、半年ニシテ、曙ケザルコト半年ナリ。冬至ノ日ハ南極ニ麗（ひか）り、夏至ノ日ハ北極ニ麗リテ、常ニ日ノ横回スルヲ見ル。……又、半象限ヲ過グレバ、二至ハ其ノ点ヲ反シ、氣候ハ相ヒ同ジキナリ。又、一象限ヲ過グレバ、輪輪軸軸ハ相ヒ当タリテ、旧ニ復ス。（『梅園全集』三四一頁下）

「数万年ノ後ニ、黄赤ハ同ジク其ノ輪ヲ合ッシ、同ジク其ノ軸ヲ合ッス」とは、今から数万年後の天文氣象現象の様子を描いたものである。黄道と赤道は現在、夏至の時には北に二十三・四度、冬至の時には南に二十三・四度開いている。数万年後には、此の開きが亡くなって、赤道と黄道が一致し、赤軸と黄軸が一致すると云うのである。「此ノ時、日ハ恒ニ赤道ヲ行キ、昼夜ハ長短アルコト無シ」とは、赤道と黄道・赤軸と黄軸が一致した時には、夏至と冬至が亡くなるので、春分と秋分が同一化し、「昼夜」の長短も亡くなる。「二極ハ恒ニ半輪ノ日ヲ見」とは、此の時、南北の二極点地帯に視座を据えて観測する者には、地平線上に互いに一個の太陽の半分のみを見ると云う。其の時には当然「冬」と「夏」がなくなる。此の様な変化は漸進的に進行し、再び赤道と黄道・赤軸と黄軸が「一即一

一」の「条理」に従って分かれて行き、数十万年を経歴しての後には、嘗ての黄道は嘗ての赤軸の位置に、嘗ての赤道は嘗ての黄軸の位置に移動する。こうなると、嘗ての北は嘗ての東となる。新たに成立した赤道を境にして、嘗ての「西極点」と嘗ての「東極点」地方に「白夜」と「黒昼」が交互に現象する。為に、冬至の季節の太陽は南極点地方の天空に麗（かが）やき、夏至の季節の太陽は北極点地方の天空に麗やき、それぞれに、常に太陽が横回りに天空を巡って「白夜」となる。……又、半象限即ち九十度移動すると、冬至と夏至は其の現象する地点を反転するが、此の二地域の氣候の現象の仕方は互いに同一である。又、一象限即ち九十度移動すると、黄道と黄道、赤道と赤道、及び黄軸と黄軸、赤軸と赤軸が互いに重なつて、現在の位置に復旧する。

此の壮大な宇宙の変転現象を梅園に伝えたのは、梅園の親友である有名な天文学者の麻田剛立である。梅園は此の新学説を「常変」と云う「境域」で、「条理」的に解釈し、次の様に最大級の賛辞を剛立に対して送っている。

資料 6

・人ハ、夏蟲ノ見ニ滞リテ、之レヲ敢ヘテ是トスル無シト。晋（梅園の名前）ハ聞キテ、大ヒニ其ノ言ニ感ジテ曰ハク、剛立氏ノ術ハ是コニ至リテ、神機ヲ窺ヘリ。吾ハ数ヲ知ラザレバ、条理ヲ以テ之レヲ徴セン。

〔梅園全集〕三四一頁下・『贅語』

・人々は、恰も命の短い夏虫の様な極端に短い有限の時間内での見解に滞留して、剛立の此の画期的な新見解を是認しないとのことである。私は此の新見解を耳にして、大いに感動して、次の様に意見を述べたものである。剛立氏の方術は、ここに来て、「神機」を窺い見たものである。私は数学が不得意なので、「条理」で以て其の正当性を実証して見せよう。（高橋訳）

ところが、此の想像を絶する新見解は、二十世紀の中葉に至って、剛立や梅園とは全く異なる「古地磁気学」の視座から其の正当性が証明され始めてきた。東京大学地震研究所の上田誠也教授の名誉『新しい地球観』（岩波新書）の次の様な見解がそれである。

資料 7

古地磁気学の原理は、主として日本やフランスに於いて、一九四〇年代から五〇年代のはじめにかけて開発されたが、これを巧みにそして精力的に応用して、全世界の岩石、そして全地質時代の岩石について残留磁気を測定し、それによって、地球磁場の歴史を明らかにしようとしたのは、一九五〇年代のイギリスの学者達であった。既に本書に登場してきたロンドン大学のブラケット、ケンブリッジ大学のランコーンらのグループが、異常なまでの熱意をもって、多くの測定を実行したのであった。……図一―八に見られるように、いまを去る約三億年前には、磁極の位置は現在の北極からはるか離れて、日本列島あたりにあったし、さらに六億年ほど前にはもっと離れて、南太平洋にあった。この現象は磁極の移動、あるいは極移動と呼ばれた。こうして求められた極移動はあくまでも磁極の移動なのであるが、面白いことには、その移動の様子は、以前からまったく別の方法で求められていた極の移動と大体の傾向が一致することがわかった。まったく別な極というのは、いわゆる古気候学的な極であって、極地方が暑いということに対応して、昔の生物の化石の分布などから、推定されたものであった。（三八頁）

「全偏」視座は、決して「地球」上の現象からのみ帰納され、逆に、演繹され得るだけではない。全現象と全存在に適應している。次の資料が、其の事実を雄弁に証明してくれる。

・一一ノ分カルルヤ、偏偏ハ全ヲ合ッス。全者ヨリシテ之レヲ觀レバ、正ハ又タ偏ニ合ッス。近ク之レヲ言フニ、男ト女トノ如シ。夏ト冬トノ如シ。夜ト昼トノ如シ。聖ト愚トノ如シ。故ニ、天ノ万物ヲ散ズルヤ、偏偏、合ッシテ全ナリ。人ハ神氣ニ長ズレバ、物ハ本氣ニ長ズ。物ハ横ニ偏ナレバ、人ハ堅ニ偏ナリ。鳥飛ビ魚潜ルモ、分カルレバ則チ偏ニ走ル。故ニ、正ナル者ハ偏ノ對ナリ。全ナル者ハ偏ノ合ナリ。〔梅園全集〕『贅語』四三六頁下）

「一一ノ分カルル」とは、「一」が「一即一」の「条理」に従って「剖析」すること、「偏偏ハ全ヲ合ッス」とは、「偏」と「偏」が「一即一」の「条理」に従って「合一」して「全」になることである。「正ハ又タ偏ニ合ッス」とは「偏偏」の「境域」とは異なる「偏正」「境域」の新たな存在を指示している。

「近ク之レヲ言フ」とは、卑近な具体例で解説すると云うことである。「男ト女ノ如シ。夏ト冬ノ如シ。夜ト昼トノ如シ。聖ト愚トノ如シ」には、既に考証してきた「冬夏」と「昼夜」が含まれている事は、此の際、留意を要する。つまり、「男女」と「聖愚」が「冬夏」と「昼夜」に等置されている事実である。「故ニ、天ノ万物ヲ散ズルヤ、偏偏、合ッシテ全ナリ」とは、以上の一応の結論である。此の一節の中の「万物」には、云うまでもなく「冬夏」や「昼夜」の様な自然現象から「男女」と云う人間、「聖愚」と云う人間の在り方までが含まれている事実も、留意を要する。「偏偏、合ッシテ全ナリ」とは「一即一」の「条理」に従って、「偏」的なものと「偏」的なものが「合一」して「全」的なものになることである。「人ハ神氣ニ長ズレバ、物ハ本氣ニ長ズ」とは、「人物」の「境域」の特性を述べたものである。「物ハ横ニ偏ナレバ、人ハ堅ニ偏ナリ」とは、動物は四足で横になって歩くのに対して、人間は二本足で堅に立って歩く様を述べたものである。「鳥飛ビ、魚潜ル」とは、「一」としての「生物」を「水燥」の

「境域」で、「一一」的に「燥物」としての「鳥」と「水物」としての「魚」に「剖析」すれば、即ち「分カテバ則チ偏ニ走ル」ことになる。「正ナル者ハ偏ノ対ナリ」とは、「全・偏」の「境域」に対して、別に「正偏」の「境域」が新たに成立することを述べたものである。

資料9

・万物、羅列スレドモ、其ノ間ニ並立ス。則チ己ニ其ノ物ヲ並べレバ、偏偏、一ニ合ッス。是コヲ以テ、動ハ神氣ニ専ラニシテ、植ハ本氣ニ専ラナリ。『梅園全集』九一頁下『玄語』「天冊立部」

「万物」は、一見アトランダムに羅列している様であるが、実は、天地の間に「並立」している。既に、「万物」が「並立」してしまつと、「一一」的な「偏」と「偏」が「一」に、「全」的に合一する。以上の様な理由で、動物は「神氣」が、植物は「本氣」が支配的となる。

資料10

・偏ナル者ヨリ之レヲ觀レバ、彼ニ無キ者ハ我ニ有リ。全ナル者ヨリ之レヲ觀レバ、彼ニ混有スル者ハ、此レニ榮立ス。是ノ故ニ、身ノ有ル者ハ本末内外ヲ有ス。動ハ外ヲ実シ、植ハ内ヲ実ス。動ハ上ヲ本トシ、植ハ下ヲ本トス。本末内外ハ、動植ノ同ジキ所ナリ。『梅園全集』二五八頁上・『玄語』

此れは、「偏」の視座と「全」の視座から「動植」の「境域」を展望したものである。「彼ニ無キ者ハ我ニ有リ」とは、「偏」的視座から動物と植物を比較対照して観察すると、互いに「有無」を「一一」的に相い反すると云うのである。「彼ニ混有スル者ハ、此レニ榮立ス」とは、「全」的視座から「生物」と「動植物」を比較対照して観察すると、「生物」と云う「境域」では混然と保有し、「動植」と云う「境域」では榮然と定立している。「身ノ有ル者ハ本

末内外ヲ有ス」とは、動物が肉体を、植物が植物体を保有している限り、そこには必ず「本末内外」の「方位」がある。以下は、次の様な意味になる。「本末内外」の内の「内外」視座から展望すると、動物は肉体の外部が「実」的で、内部が「虚」的であるのに対して、植物体の方は内部が「実」的で、外部が「虚」的である。「本末」視座から展望すると動物は上部が「本」的であるのに対して、下部が「末」的であり、植物は其の逆である。しかし、「全」的視座から展望すると、「本末内外」は動物も植物も、共に保有しているものである。此の様にして、「二即一」の「一即一」の「条理」の普遍性は、「動植」と云う「小物」に依つても証明されている。

*人ハ又、其ノ形ニ就ヒテ方位ヲ分カテバ、則チ、前後左右・本末内外ヲバ、以テ紀ス。〔梅園全集〕一一八頁上『玄語』〔地冊没部〕

第五節 結論

天才の仕事は、時代の古今を問わず、洋の東西を問わず、其の時代には受け入れられない悲劇性を持つ。三浦梅園も、実は此の悲劇性から逃れることは出来なかった。しかし、「三浦梅園の哲学」は天才の所産であるが故に、没後二百年の今年になって、「現代の問題」を解決する方法に哲学的基礎を与えることとなった。

「現代の問題」、其れは、人類の生存そのものにかかわる「環境問題」である。梅園の「条理」を活用して「天地」の「境域」で表現すれば、「天」に於ける「フロンガスの問題」と「地」に於ける「海洋汚染」の問題である。此の問題を解決する為の唯一の哲学的方法が、本論の中で展開してみせた各種の「視座」の統合としての「球体視座」である。二十一世紀の哲学でもあるからである。